〈研究ノート〉

学部横断型キャリア教育が大学生のキャリアイメージに及ぼす影響
―ジェンダー分析を通して―

東京大学大学院教育学研究科　博士課程後期　九鬼　成美
法政大学キャリアデザイン学部　教授　梅崎　修
法政大学キャリアデザイン学部　教授　田澤　実

1　背景と問題設定

本稿の目的は、大学のキャリア教育科目を受講した大学生のキャリアイメージの変化をジェンダーの観点から明らかにすることである。

2011年の大学設置基準で義務化されたことでひろく普及した（文部科学省 2018）大学のキャリア教育科目は、「社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度の育成を通じてキャリア発達を促す教育」（中央審議会 2011）とされている。大学の進学率（短大を除く）は 57.7%（文部科学省 2023）にのぼり、大学が多様化している昨今、大学は大卒労働者の送り出し機関としての機能が増大した。実際、多くの学生が卒業後は企業などに就職しており、社会と教育の接合を志向するキャリア教育の重要性は増している。高等教育における大学のキャリア教育の学習成果の可視化の観点からも、キャリア教育の授業の受講による学生への影響を検証する意義は大きい。

1990年代後半からの技術革新やグローバル化の促進によってキャリアはより多様なものとなり、キャリアはいくつかのコースから最適なものを選択するのではなく、構築するものと想定されるうるようになった（Watts1996）。このような中で、これから社会に出ていく学生がどのようにキャリアをイメージするのかは、学生たちのその後のキャリア形成において何を考え行動するのかに影響する重要な論点であるといえる。

一方で、日本においてキャリアを考えるとき、大きな影響を与えている要因の一つがジェンダーである。従来から就労中断・再就職や非正規雇用での就労など、多様なキャリアをたどることを余儀なくされていた女性のキャリアと、正社員としての就職を前提に想定された男性の画一的なキャリアという、男女のキャリア形成上の不平等は、キャリア教育において重要な論点である。学生がより多様なキャリアを柔軟に構築できるようになることを目指すとき、ジェンダーの不平等や固定観念は大きな影響を与えることが予測できるからだ。すなわち、キャリアへのイメージは学生のジェンダーによって異なることが考えられる。したがって、男女で異なるキャリアを想定している日本社会の影響を受けてきた学生たちがキャリア教育科目を受講したことによる変化は、男女別に検証する必要があると考える。

またこれまで、大学のキャリア教育は就職活動支援や自分探しに傾倒していることが問題視されてきた（児美川 2007、五十嵐 2016）。現在の大

学におけるキャリア教育は、就職活動の支援だけでなく卒業後の人生全体への支援であることが求められている（児美川 2015）。すなわち、就職活動やその支援はもちろん重要であるが、学生に自身の人生全体の中で就職活動や職業をライフイベントやほかの社会的な役割に結びつけて考えさせることも同時に行われていく必要がある。

したがって本稿では、ジェンダーとライフキャリアの観点から、大学生のキャリアイメージの全体像とキャリア教育科目の受講によるそれの変化を明らかにしていく。

2　先行研究

（1）キャリアのイメージ

キャリアのイメージに関して、Inkson(2004) は、私たちはキャリアを見るための個人的なレンズ、つまりキャリアが何であるかについての独自のイメージを持っており、それは主に9つのメタファーで語られると論じた。すなわち、①レガシーのメタファーによる継承するものとしてのキャリア（Legacy metaphor: Career as inheritance）、②物のメタファーによる構築物としてのキャリア（Craft metaphor: Career as construction）、③季節のメタファーによるサイクルとしてのキャリア（Seasons metaphor: Career as cycle）、④マッチングのメタファーによる適合としてのキャリア（Matching metaphor: Career as fit）、⑤道のメタファーによる旅としてのキャリア（Path metaphor: Career as journey）、⑥ネットワークのメタファーによる出会いと人間関係としてのキャリア（Network metaphor: Career as encounters and relationships）、⑦劇場のメタファーによる役割としてのキャリア（Theater metaphor: Career as role）、⑧経済的なメタファーによる資源としてのキャリア（Economic metaphor: Career as resource）、⑨物語のメタファーによるストーリーとしてのキャリア（Narrative metaphor: Career as story）、以上のようなメタファーによるイメージでキャリアは語られていると主張した。

日本において大学生に対して記述式でキャリアのイメージを調査したデータを使用する研究は多くはないが、「勤労観」「職業観」「労働観」に関する研究は数多い（江口・戸梶 2009等）。一方で、既存の社会からの「望ましさ」を含んだ価値観ではなく、イメージを若者自身から抽出し検討する必要があるという視点から、就職に対するイメージを分析した研究に杉本（2012）がある。杉本(2012)は3大学53名の学生の就職に対するイメージについて、自由記述形式の回答を KJ 法によって分類した。その後、これらを質問項目化した質問票を作成し、761名の大学生に質問紙調査を実施し因子分析を行った。その結果、最終的な因子パターンは、拘束的イメージ、規範的イメージ、希望的イメージ、自律的イメージの4つであった。杉本（2012）の分析は大学生に対する自由記述形式のテキストの分析を行っている点が本稿の方法と共通しているが、問題関心は就職のイメージに限られている。キャリア教育が想定するキャリアがワークキャリアだけではなくなった今日においては、就職だけではなくキャリア全体に関するイメージの分析を行う必要があるだろう。

（2）キャリアのイメージとジェンダー

進路の選択やキャリア展望に影響する自己効力感などの意識は、生徒・学生の性別や性別役割分業意識によって影響を受けると実証されている（鈴木 1998、鈴木・山下 2021）。背景には、日本社会においてジェンダーによるキャリア上の不平等が残存している状況（中井 2009、内閣府 2020a）がある。

1990年代から産業構造の変化やバブル崩壊後の非正規雇用の拡大によって、若者は労働市場への参入が厳しくなった。その中でも、女性はいっそう不利な立場に立たされている。就労の継続に注目すると、「女性の性別役割意識・価値観は着実に変化してきているものの、もっぱら家庭との役割調節を行いながら断続的な就業パターンをとるという制度化されたライフコースは今なお優

勢」（中井 2009：pp.700-701）で、女性が結婚・妊娠・子育てのために職業キャリアの中盤に就労を中断することは、いまだに大きな問題である。内閣府男女共同参画社会局の広報誌『共同参画』（2020a）においても、仕事と家庭のバランスをめぐって希望と現実の乖離が起こっていることが指摘され、社会全体としてワーク・ライフ・バランスを実現するためには、「まず家事・育児等の家庭責任が女性に偏っている状況を解決する必要があり、引き続き、男性の家庭生活（家事・育児等）への参画を促進することが重要」（内閣府 2020a、p.4-5）とされている。このように、男女平等の実現や女性の社会進出には、社会構造の変革や意識改革が必要とされているが、日本においてそれらは、いまだ達成されたと言うには程遠い状況である。

このような中で、大学はジェンダー平等の視点を持って学生たちのキャリア形成を支援することを求められている（内閣府 2020b）。鈴木・山下（2021）は4年制大学6校、短期大学6校の女子学生に対し行った調査の結果、労働に関する基本的事項の認知度が高さは自分のキャリアに非正規雇用を選びにくくさせた。また、ジェンダーバイアスの強さは非正規雇用の肯定的イメージを向上させた。さらに、短期大学の学生の方が非正規雇用に対する容認度が高く、在学中に取得する資格と就職との関連性がないと非正規雇用に対するイメージが肯定的になることが明らかになった。よって、女性の正規雇用へのエンパワメントには、労働に対する基本的な知識を習得する機会を保障するとともに、ジェンダーバイアスを相対化する機会が必要であり、そのうえで自身のキャリアイメージを明確にする必要性を論じている。実際に、大野・目良（2020）は大学のキャリア教育はジェンダー規範を相対化し、キャリア形成を支援することを目的とした授業を行い、その授業の影響について検証した。具体的には、4回の質問票の分析と各回授業後の感想のテキスト分析を行った。この結果、学生は授業内容に応じて女性のライフキャリアの多様性・柔軟性を理解したこと、また価値観の揺らぎを経験し自らのキャリアプランを相対化する機会となっていたことが示唆された。

鈴木・山下（2021）、大野・目良（2020）の研究はキャリアとジェンダーの関連をテーマとしている点は本稿の問題関心と共有しているが、学生のキャリアイメージにおけるワークキャリアとライフキャリアの関連は明らかにされていない。したがって本稿では、学生のキャリアイメージについての自由記述によって、キャリアがどのような語でイメージされているのかと、それがキャリア教育科目の受講によって変化するのか、変化する場合どのように変化するのかを、ワークキャリアとライフキャリアに注目したジェンダーの視点から明らかにする。

3　データの概要と分析手続き

（1）「キャリアデザイン入門」の授業の概要

本稿が対象とする大学のキャリア教育の授業である「キャリアデザイン入門」は、関東近郊の私立大学のキャリアセンターが行っている学部横断型の科目である。授業目的は、学生に大学での過ごし方と社会で働くことについて基本的な理解を深めることで学生生活を有意義に過ごせるよう支援することである。同科目は学部横断型で展開しており、1年生より受講可能な科目である。WEBシラバスで公開されている「キャリアデザイン入門」の授業の計画を表3-1-1で示した。授業の内容は就職活動支援だけでなく社会の状況、社会問題の理解やライフキャリア、職場体験や非認知能力の育成など、多岐にわたる。

（2）データの概要

本調査の対象は「キャリアデザイン入門」を受講した学生である。調査票は、「キャリアデザイン入門」の初回授業 (wave1) と最終授業（wave2）で配布した。調査の結果、wave1（2023年4月7日～2023年6月2日）の回収数はN = 1,494、wave2（2023年7月7日～2023年7月26日）の回収数はN = 814であった。

表 3-1-1 「キャリアデザイン入門」の授業計画

第1回	オリエンテーション	第8回	インターンシップ
第2回	大学での学び	第9回	思考のメカニズム
第3回	激変する社会環境と直面する課題	第10回	意思決定と認知バイアス
第4回	働き方と多様性	第11回	仕事と幸福
第5回	働くことの意味	第12回	チャンスを広げるための行動様式の改革
第6回	結婚、家族、ジェンダーを取り巻く諸問題	第13回	学生生活と就職の準備
第7回	グローバル化社会と異文化理解	第14回	学生時代の過ごし方

（出所）法政大学の WEB シラバス（https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php）を参考に筆者作成。

テキストとして使用した質問項目は、「あなたは、キャリアと聞いて、何を思い浮かべますか。イメージした単語や文章を書いてください。」という質問に対する自由記述形式の回答である。性別は男性／女性／その他の3択の質問項目を使用した。なお分析に際しては、性別「その他」のケース数が極端に少なかった（wave1で7ケース、wave2で3ケース）ため除外した。その結果、分析ケース数は wave1が N=1,389(男性 687人、女性 702人)、wave2が N=811(男性 365人、女性 446人) である。

（3）分析方法

分析ではテキストマイニング分析を行った。テキストマイニング分析では、テキストを最小単位で分割し分析を行う。このため実際の文脈を解体してしまうというデメリットがあるが、分析負担が非常に高い大量のデータを分析できるという利点がある。また、本稿で使用されたテキストデータは単語や短く簡潔な文章で回答されており、文脈の解体は大きな問題にはなりにくいと考えられる。そのため、wave1が N=1487、wave2が N=811の計2298個の自由記述形式のテキストデータの分析を行うためには、テキストマイニング分析を使用することが妥当であると判断した。分析には、テキストを計量分析できるソフトウェアである KH Coder を主に使用した。

分析ではまず、文章を単語ごとに区切ったデータを作成した。抽出した単語の中で、助詞や助動詞は、文章の特徴を表す単語ではないため、分析には使用しない。動詞、形容詞、形容動詞のように活用する単語は、すべて1種類の単語として数えられるよう基本形に直して取り出している。また、「就活」や「キャリアハイ」等、KH Coder が自動的に抽出できない外来語や造語等の単語は強制抽出をした。

以上のような KH Coder の処理の結果を表3-3-1に示した。本稿で使用したテキストデータの総抽出語は、wave1においては 9,353語（男性は 4,308語、女性は 5,026語）、wave2においては 5,968語（男性は 2,474語、女性は 3,476語）であり、そのうち助詞や助動詞等分析に使用しなかった品

表 3-3-1 wave、性別ごとの総抽出語数、単語の種類数

	総抽出語数	使用する総抽出語数	単語の種類数	使用する単語の種類数
wave1	9,353	4,657	899	731
wave1 男	4,308	2,136	610	484
wave1 女	5,026	2,501	609	467
wave2	5,968	2,990	707	554
wave2 男	2,474	1,233	445	336
wave2 女	3,476	1,748	518	394

詞の語を抜いた抽出語数は、wave1においては4,657語（男性は2,136語、女性は2,501語）、wave2においては2,990語（男性は1,233語、女性は1,748語）であった。また、語の中で異なる語の種類の数は、wave1においては899種類（男性は610種類、女性は609種類）、wave2においては707種類（男性は445種類、女性は518種類）であり、分析に使用した語の種類は、wave1においては731種類（男性は484種類、女性は467種類）、wave2においては554種類（男性は336種類、女性は394種類）であった。

（4）分析手順

本稿では以下の手順で分析を行った。第一に、学生のキャリアイメージの分類を行い、分類の授業の前後の変化を男女別に比較検討した。具体的にはまず共起ネットワーク分析を使用した。分析結果は共起性の強い上位60位の抽出語で示した。抽出されたSubgraphによって、学生のキャリアのイメージで共起する傾向のある語群を分類する。この分析を男女別のwave1のデータとwave2のデータで行い、分析結果の比較検討を行った。

第二に、性別と抽出語によってコードされたキャリアのイメージのコードとのクロス集計を行った。コーディングを行う際は特にライフキャリアに関するイメージに注目する。これによって、キャリアのイメージの中でライフキャリアに関するイメージを持つ人は、授業前後でどのように変化したのか比較検証する。具体的には、コーディ

表 4-1-1　頻出語上位 20 位

wave1 男性		wave2 男性		wave1 女性		wave2 女性	
抽出語	回	抽出語	回	抽出語	回	抽出語	回
人生	216	人生	120	仕事	271	仕事	155
仕事	148	仕事	67	人生	176	人生	106
経歴	121	経歴	63	経験	119	経験	57
自分	112	自分	58	自分	101	経歴	56
経験	71	経験	39	経歴	87	自分	54
職業	68	職業	31	職業	80	職業	50
キャリア	53	キャリア	26	将来	72	将来	48
将来	45	今	22	就職	67	就職	44
設計	34	将来	18	キャリア	59	キャリア	38
就職	31	就職	17	キャリアウーマン	43	キャリアウーマン	27
人	30	人	12	人	38	働く	24
今	29	設計	12	働く	37	イメージ	18
実績	20	思う	11	今	34	人	18
学歴	18	生きる	11	イメージ	28	今	16
歩む	18	自身	10	学歴	28	実績	14
思う	17	イメージ	9	設計	27	職歴	14
社会	17	実績	9	実績	23	設計	14
イメージ	16	生き方	8	職歴	23	スキル	13
自身	15	キャリアウーマン	7	社会	22	学歴	12
資格	14	会社	6	考える	21	考える	12
転職	14	学歴	6			社会	12
道	14	出世	6				
		聞く	6				

注 1. 回数が同列 20位の語はすべて記載した。

ングではライフキャリアに関するイメージのカテゴリーをコーディングし、比較対象として仕事や就職などのワークキャリアに関するイメージのカテゴリーを作成しコーディングした。コーディングの作業は語とデータの往復によって行った。

4　分析結果

（1）抽出語と出現回数

まず、自由記述の概要として、男女別の wave1 と wave2それぞれの自由記述の頻出語の上位 20 位を表 4-1-1に示した。

wave1 と wave2ともに、男性の回答で最も多い語は「人生」、であり次いで「仕事」、「経歴」、「自分」、「経験」、「職業」、「キャリア」の順に多かった。女性の回答で最も多い語は、wave1 と wave2 ともに「仕事」であり、次いで「人生」、「経験」の順に多かった。

男女で出現数が大きく異なる語は「キャリアウーマン」で、女性の回答者が多い。「キャリアウーマン」と回答している記述を確認すると、単に仕事をしている女性という意味で書かれている場合と、「バリバリ」や「官僚」という言葉と共にエリートという意味で書かれている場合があった。

（2）分析 1：共起ネットワーク

次に、3回以上出現した抽出語によって共起ネットワーク分析を行い、結果を図 4-2-1～図 4-2-4 に示した。1つの円の大きさは該当する抽出語語の出現する頻度を示し、大きいほど出現回数も多い。語と語の間の共起性は円を結ぶ直線で示されており、Subgraph は共起している語群の分類を示している。

図 4-2-1～図 4-2-4から、Inkson(2004) の分類を参考にキャリアイメージについての Subgraph は表 4-2-1のように解釈した。なお、wave1の女性の Subgraph8はキャリアのイメージそのものというより回答の前後の文章で文意を伝えるための単語として使用されていたため、キャリアのイメージとしては扱わない。

図 4-2-1　wave1 の男性の共起ネットワーク

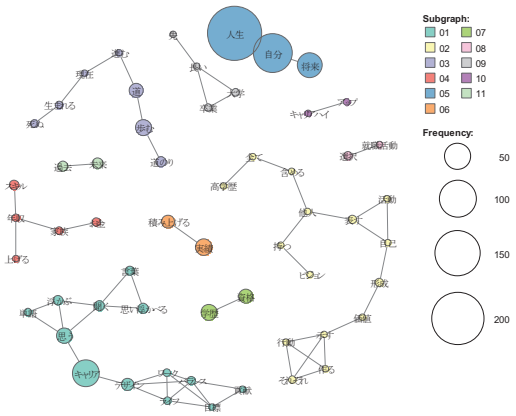


図 4-2-2　wave2 の男性の共起ネットワーク

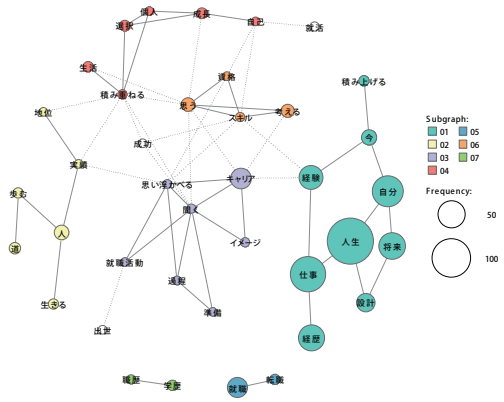
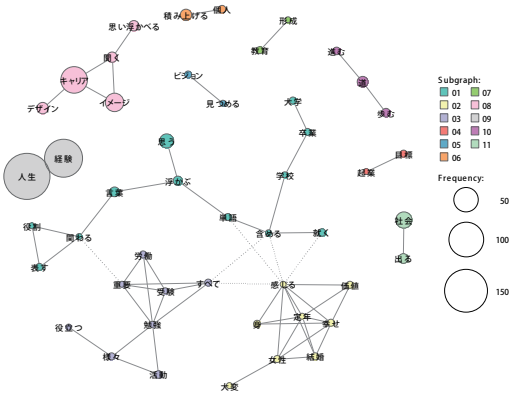


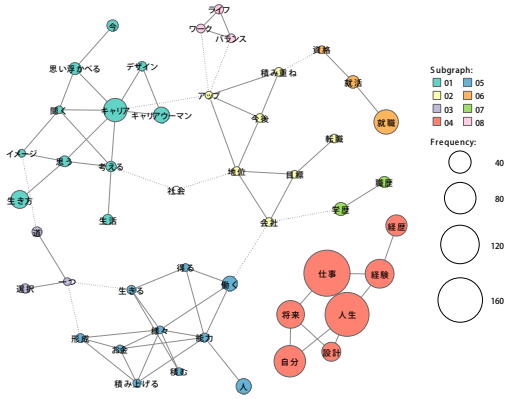
図 4-2-3　wave1 の女性の共起ネットワーク



wave1 と wave2、性別による結果、特徴的な点は以下の 3点に整理できる。

第一に、男性の wave1 と wave2を比較して特

図 4-2-4　wave2 の女性の共起ネットワーク



徴的な点である。男性は wave1 ではライフに関するイメージが Subgraph1「ワーク・ライフ・バランスとデザイン」や Subgraph　4「お金と家族」に示された。それに対し、wave2ではライフに関するイメージは Subgragh4「個人の成長と生活の積み重ね」の中の「生活」の語のみの数少なく抽象的なものとなった。また、自分の実績や成長を積み上げるものとしてのイメージが7つの Subgraph 中 3つの Subgraph（Subgraph 2, 6, 7）で描出された。

第二に、女性の wave1 と wave2を比較して特徴的な点である。女性は wave1ではライフに関する語は Subgraph2「女性とワークとライフ」と Subgraph　7「プランと生き方」であった。一方、wave2では 8つの Subgraph 中 3つの Subgraph である、Subgraph1「生き方とデザイン」、Subgraph5「生きることと働くことと能力」、Subgraph8「ワーク・ライフ・バランス」が、生き方やワークキャリアとライフキャリアの両立に関するイメージとして描出された。

第三に、男女で比較して特徴的な点である。男性の wave1では Subgraph4「お金と家族」で示されているように、「お金」や「年収」は「家族」と共起する語である。一方で、女性の wave1の Subgraph2「女性とワークとライフ」では「結婚」が「価値」「幸せ」と共起しており、wave2では家族形成に関する具体的なライフイベントに関する語やそれについての Subgraph は示されなかった。

（3）分析 2：コーディングとクロス分析

最後に、授業の前後のキャリアのイメージの回答において、性別とキャリアのイメージのコードとのクロス集計を行った。

コーディングではライフキャリアに関するイ

表 4-2-1　共起ネットワークの Subgraph の一覧

	wave1 男性	wave2 男性	wave1 女性	wave2 女性
Subgraph1	ワーク・ライフ・バランスとデザイン	履歴	大学卒業後の仕事・役割	生き方とデザイン
Subgraph2	行動や価値形成	道と実績	女性とワークとライフ	積み重ね
Subgraph3	死ぬまでの道	就職活動の準備	労働とこれまでの勉強	道
Subgraph4	お金と家族	個人の成長と生活の積み重ね	起業と目標	仕事と経歴
Subgraph5	将来	就職と転職	ビジョン	生きることと働くことと能力
Subgraph6	実績を積み立てる	スキルや資格	積み上げたこと	就職活動と資格
Subgraph7	学歴と資格	職歴と学歴	プランと生き方	履歴
Subgraph8	就職活動と職業選択		（イメージではない）	ワーク・ライフ・バランス
Subgraph9	卒業の先		人生経験	
Subgraph10	アスリートのキャリアハイ		道	
Subgraph11	時間		社会に出ること	

メージのカテゴリーをコーディングし、比較対象として、仕事や就職などのワークキャリアに関するイメージのカテゴリーを作成しコーディングを行った。コードとコーディングに使用した抽出語との対応は、表 4-3-1に示した。

表 4-3-1　コーディング表

コード	抽出語
ライフキャリアに関するイメージ	ライフ、生活、結婚、出産、家族、家庭、趣味、バランス、生き方、生まれ、生涯
就職活動、職業に関するイメージ	就職、就職活動、資格、出世、会社、職場、転職、稼ぐ、給料、起業、昇進、ステータス、インターンシップ、サラリーマン

分析の結果のクロス表を、表 4-3-2に示した。かっこの中には、性別ごとのケース数の中でコードされる記述をした人の割合を示している。

表 4-3-1のように wave1、wave2のキャリアのイメージテキストをコーディングした結果、ライフキャリアに関するキャリアのイメージのテキストは wave1で N=70（うち男性は 30、女性は 40）、wave2で N=75（うち男性は 21、女性は 54）であった。一方、ワークキャリアに関するキャリアのイメージのテキストは wave1で N=183（うち男性は 73、女性は 110）、wave2で N=129（うち男性は 47、女性は 82）であった。

表 4-3-2　性別とキャリアのイメージにコードされる回答の回数と割合のクロス表

wave1	ライフキャリアに関するイメージ	ワークキャリアに関するイメージ	ケース数
男性	30 (4.37%)	73 (10.63%)	687
女性	40 (5.70%)	110 (15.67%)	702
合計	70 (5.02%)	183 (13.12%) *	1389

wave2	ライフキャリアに関するイメージ	ワークキャリアに関するイメージ	ケース数
男性	21 (5.75%)	47 (12.88%)	365
女性	54 (12.11%)	82 (18.39%)	446
合計	75 (9.21%) **	129 (15.85%) *	811

注 1.　*：0.05≧ p ＞ 0.01であり 5% 水準で有意、
**：0.01≧ p ＞ 0.001であり % 水準で有意

ライフキャリアに関するイメージについては、職業に関するイメージよりは全体的に記述する人は少ない。その中で、wave1では、有意ではなかったものの女性の回答率の方が 1.33ポイント高かった。wave2では、1%の水準で有意に、女性の回答率の方が 6.36ポイント高かった。

ワークキャリアに関するイメージについては、wave1では、5%水準で有意に男女差があり、女性の回答率の方が 5.04ポイント高かった。wave2では、有意ではなかったものの女性の回答率の方が 5.51ポイント高かった。

5　結論と考察

以上のように、本稿は大学のキャリア教育科目を受講した大学生のキャリアイメージの変化をジェンダーの観点から明らかにすることを目的に、大学生にキャリアイメージを自由記述形式で回答させた wave1と wave2の男女別のテキストデータをテキストマイニングで分析した。以下では、分析結果を次の 4点に整理し、それぞれの結果から考察できることを述べる。

第一に、共起ネットワーク分析の結果、男性は wave1ではライフに関するイメージが示されたのに対し、wave2ではライフに関するイメージを示す Subgraph は少なく抽象的になり、自分の実績や成長を積み上げるものとしてのイメージが 7つの Subgraph 中 3つの Subgraph で描出された。

第二に、女性は wave1ではライフに関する 11つの Subgraph 中 2つであった。一方、wave2では 8つの Subgraph 中 4つの Subgraph が、生き方やワークキャリアとライフキャリアの両立に関するイメージとして描出された。

第一、第二の知見は、キャリア支援科目は男子学生に対して、キャリアのイメージを仕事において自分の能力を発揮し積み上げることとして伝達し、一方で、女子学生に対しては、キャリアは家庭と仕事の両立したりやバランスをとるものとし

て伝達している可能性を示唆する。その場合、女性が断続的な就業パターンをとる傾向（中井2009）のある現代日本のキャリアのジェンダーの不平等を容認するメッセージをキャリア教育から学生が受け取る可能性を指摘できるだろう。

第三に、男女で比較して特徴的な点である。男性のwave1ではSubgraph4「お金と家族」で示されているように、「お金」や「年収」は「家族」と共起する語である。一方で、女性のwave1のSubgraph2「女性とワークとライフ」では「結婚」が「価値」「幸せ」と共起しており、wave2では家族形成に関する具体的なライフイベントに関する語やそれについてのSubgraphは示されなかった。この結果からは、家族は男性が養うものという男性稼ぎ方モデルを男子学生が内面化しており、「キャリアデザイン入門」の授業前後でそれは変化していない可能性を指摘できる。

第四に、ライフキャリアに関するイメージについては、職業に関するイメージよりは全体的に記述する人は少なかった。その中で、wave2の女性は男性に比べて有意にライフキャリアに関するイメージを記述する人が多かった。このことは、「キャリアデザイン入門」の授業が女子学生に対してライフキャリアに関するイメージを想像させ、理解させることができたことを示唆する。

以上のように、「キャリアデザイン入門」の授業はキャリアイメージにおけるライフキャリアに関する事項を女性に対しては身につけさせることができたが、男性に対しては強調されていなかった可能性が考えられる。よって、男子学生に対してライフキャリアの重要性をより強調する必要があることが実践的示唆として示された。前述したように、学生たちはすでにジェンダー不平等な社会の中で影響を受けており、女子学生がもともとライフキャリアに関するキャリアイメージを持ちやすく、授業においても積極的に情報を受容している可能性はあるだろう。しかし、男子学生の一部はキャリアイメージとして授業前からライフ・ワーク・バランスを挙げていた。キャリア教育科目の受講を通じて、キャリアを実績や成功の積み上げだけとしてではなく生活との関係の中でイメージすることができるようにする働きかけが重要である。

参考文献または引用文献

江口圭一・戸梶亜紀彦（2009）「労働価値観測定尺度（短縮版）の開発実験」『社会心理学研究』第49号, pp.84-92

五十嵐敦（2016）「大学におけるキャリア教育のとらえ方に関する研究：福島大学での教員意識調査の結果から」『福島大学総合教育研究センター紀要』21巻, pp.31-38.

Inkson, K. (2004) Images of career: Nine key metaphors, *Journal of Vocational Behavior*, 65(1), pp.96-111.

児美川孝一郎（2007）『権利としてのキャリア教育』明石書店.

_____（2015）「若者の実態を直視し，社会の進路も同時に拓くキャリア教育・経済教育」『経済教育』第34号, pp.6-9.

文部科学省(2018)「大学における教育内容等の改革状況について(平成30年度)」（2024年2月20日アクセス）https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00007.htm.

_____（2023）「学校基本調査」（2024年2月20日アクセス）https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm.

内閣府（2020a）「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）レポート2019特集「ワーク・ライフ・バランスの希望と実際の一致状況」内閣府男女共同参画局推進課」『共同参画』5月号, pp.4-5.

_____（2020b）「第5次男女共同参画基本計画～すべての女性が輝く令和の社会へ～」（2024年2月20日アクセス）https://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/5th/index.html.

中井美樹（2009）「就業機会、職場権限へのアクセスとジェンダー」『社会学評論』第59巻, 4号, pp.699-715.

大野祥子・目良秋子（2020）「女子大学におけるキャリア教育の在り方とその教育効果に関する検討2：

本学初等教育学科学生のキャリア意識の推移とテキスト分析」『生涯発達心理学研究』第 12 号 , pp.79-90.

杉本英晴（2012）「大学生の就職に対するイメージの構造」『キャリア教育研究』31 巻 , 第 1 号 , pp.15-25.

鈴木淳子（1998）「若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について――就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン」『社会心理学研究』第 11 集 , 3 号 , pp.149-158.

鈴木真由子・山下伶（2021）「働き方に対する女子学生の意識の実態」『生活文化研究』第 58 号 , pp.1-7.

中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」.

浮村眞子・浦坂純子（2019）「大学におけるキャリア教育が就労意識に与える影響――画一的なキャリア展望強化に関する一考察」『キャリアデザイン研究』第 15 号 , pp.73-86.

Watts A.G. (1996) Socio-political ideologies in guidance, *Rethinking Careers Education and Guidance, Theory, Policy and Practice*, pp.352-355.

The Impact of Cross-Departmental Career Education on University Students' Career Images : Through a Gender Analysis

KUKI Narumi
UMEZAKI Osamu
TAZAWA Minoru

Japanese universities are diversifying and expanding their role as institutions that produce graduates for the workforce. Against this backdrop, the importance of career education for students is increasing. This study examined the impact of cross-departmental career education courses offered at private universities in the Kanto region on university students' career images from a gender perspective. These courses cover support for job-hunting activities and understanding social conditions, social issues, marriage, family, and gender issues. Gender inequality in career development in Japan is serious. Many women continue to adjust their roles between family and work, and employment is intermittent. Therefore, it is necessary to analyze how Japanese university students envision their careers by gender.

The survey targeted first-year students who enrolled in an introductory course, asking them to describe their career images in an open-ended format at the beginning (wave1) and at the end (wave2) of the course. The participants numbered 1,389 (687 males, 702 females) in Wave 1 and 811 (365 males, 446 females) in Wave 2.

Special attention was given to analyzing the images related to life careers and job-hunting activities. While males showed a decrease in life career-related images from wave 1 to wave 2, females showed an increase. Notably, at wave 2, females described life career-related images more often than males. This suggests that the "Introduction to Career Design" course effectively enriched and deepened the understanding of life career images among females. Furthermore, males tended to discuss "money" alongside "family," while females tended to discuss "marriage" alongside "happiness," indicating that males internalize a model of supporting the family, a notion that did not change through the course.

These results indicate that the "Introduction to Career Design" course successfully enhanced the image of life careers, particularly among females, but needs to emphasize its importance to males. This finding provides an important implication for the practical application of career subjects in educational practice.